

めまい

大森 海太

今から四十年前のある夏の夕食後、横になって片ひじついでテレビを見ていたら、とつぜん天井がぐるぐる回りだした。立ち上がるうとしてもよろけてしまって、うまく立てない。どうすることも出来なくて不安な一夜を過ごし、翌日カミサンに連れられて近くの日本医大付属病院に行った。その病院にはめまい専科のようなものがあり、いろいろな検査を受けたところ、要するに何かの衝撃で三半規管のなかの耳石が不安定になっているらしい。そう言えば十日ほど前に、庭にしつらえた子供用の鉄棒に誤ってイヤというほどおでこをぶつけて倒れたことを思い出した。

良性発作性頭位眩暈症という立派な病名をいただいたが、まあちよつと様子を見ましようとのこと。そのうち耳石が落ちついたのか、なんとなく治ってしまった。

それから十年後のあるとき、海外出張の帰途、成田空港を出て京成線に乗ったとたんに、またあのめまいが始まった。ようようのことで家にたどり着き、翌日日本医大に行ったところ、十年前と違って今回は重篤ということで即入院。飛行機の中の気圧の変化による内耳窓破裂の疑いあり、場合によっては頭蓋骨の耳のうしろに穴を開けて手術になるかもしれない。取りあえずステロイド系の薬を点滴して経過を見ましようとのこと。

頭に穴を開けられてはたまらないので、病院のベッドで一日中点滴を受けひたすら大人しくしていたところ、幸いにも回復に向かい二週間で無罪放免と相成った。

その後は全くめまいの気配もなく三十年の月日が経過した。私の場合、前二回は単に耳の中のトラブルだったが、めまいの原因はもっとシリアスな脳神経系の障害や内臓器官の不具合に起因するものもあるようなので、油断はできない。ここまで来たのだから何とか耳だけで勘弁してもらいたいものだ。

その代わりというわけでもないが、少しづつ耳が遠くなって、とくに都合の悪い話にはよく聞こえないようである。でもこれくらいで済むなら、文句は言えまい。